

## 第 22 回研究会

2026 年 2 月 14 日

英語指導法研究会第 22 回研究会は、バレンタインデー当日に、恒例企画として、あきた COFS & 英語授業研究会との協同企画「4 月から教壇に立つ学生の不安や悩みに応える」を実施しました。教員採用試験に見事合格し、来年度から教員としてデビューする 4 年生を中心とした若手教員のための特別企画で、今年で 5 年目を迎えます。

第 1 部では「若手英語教員奮闘記」と題し、現在、教員として第一線で活躍している秋田県・青森県出身の若手教員から、等身大の体験談を語っていただきました。

第 2 部では「4 月から教壇に立つ学生の不安や悩みに応える」として、春から教壇に立つ学生が、教員として仕事をするうえでの不安や疑問を率直に共有し、それに対して助言を受けるなど、ざっくばらんに意見交換を行いました。

当日は、秋田県・青森県のみならず、全国各地から合計 21 名の参加があり、バレンタインデーならではの和やかな雰囲気の中で研究会が進められました。

### 第 1 部「若手英語教員奮闘記」

---

長谷川 美夕先生（町田市立薬師中学校）

#### 1. 自己紹介

中学校教員 2 年目で、ちょうど新型コロナウイルス感染症の流行期に宮城県内の高校を卒業しました。その後、秋田大学教育文化学部英語教育コースに進学し、4 年間、英語教員を目指して学びました。在学中は若有先生のゼミに所属し、現場の教員がどのように発音指導を行っているのかという点に着目して卒業論文を執筆しました。

「チャレンジしてみたい」という思いから、東京都で教員として働くことを決意し、昨年度は初任校で副担任を経験しました。今年度は持ち上がりの学年で、初めて学級担任を務めています。

プライベートでは、休日にアニメを観ることが好きで、忙しい日々の中でも、帰宅後にゆっくりアニメを観ながら過ごす時間が良いリフレッシュになっています。

昨年度までは、1学年3クラス・約80名体制で学年運営が行われていましたが、中1ギャップへの対応としての編成であったため、今年度からは1クラス40名、2クラス編成となりました。その結果、学年全体としては引き続き80名を担当していますが、1クラスあたりの人数が多くなり、正直なところ「人がとても多い」と感じています。

教室は縦横7列ほどに机が並び、覗き込まなければ全員の表情を把握できないほど生徒が密集した環境です。そのような中で、初めての学級担任として、朝や帰りの学級活動、給食指導などの日常的な指導に加え、夏と冬に実施される三者面談にも対応しています。すべてが初めての経験で、緊張しながらも何とか乗り越え、ようやく1年が終わりそうで一区切りついたという状況です。

授業については、学校規模が比較的小さいことから、1年生から3年生まで全学年で少人数授業を実施しています。少人数教室を活用しながら、きめ細かな指導を行っています。

部活動はバドミントン部の顧問を担当しています。ちょうどこの日も、午前11時から午後2時まで部活動の指導を行ってきたところでした。顧問として、練習メニューの作成や指導、大会が日曜日に実施される際の引率など、一般的な顧問業務を担っています。

校務分掌では学習進路部を担当しており、家庭学習の進め方や進路に関わる業務、キャリア教育など、進路指導につながる分野を任されています。また、会計担当も兼務しており、4月に使用する新しい教材の購入や、行事に必要な経費が発生した際の取りまとめなどを行っています。

## 二年目の担当

二学年 担任  
学活、給食指導、面談

英語科  
1~3学年 少人数制

バドミントン部 顧問  
監督、メニュー作り、引率

その他の分掌  
学習進路部、会計

## 2. 勤務校について

勤務校は、町田市立薬師中学校です。学校のある町田市は東京都の最南部に位置し、神奈川県との県境にある地域で、感覚的には「ほとんど神奈川」という印象を持たれることも多い場所です。地域の話題としては、サッカークラブのFC町田ゼルビアや町田リス園などが知られており、また、ラーメンチェーン「町田商店」の名称の由来となった場所でもあります。

学校規模としては、1学年が4クラス・2クラス・3クラスの構成で、全校で9学級と、比較的小規模な中学校です。ただし、再来年から数えて3年後に学校統合が予定されており、薬師中学校は現在の体制での運営が残りわずかとなっています。そのため、少人数ならではのきめ細かな指導ができるのは今のうちだと感じています。

校風は全体的に穏やかで、自然に囲まれた環境にあることから、良い意味で「東京らしくない」雰囲気があります。生徒の様子も落ち着いており、周囲の景色も自然が豊かで、以前秋田で生活していた頃を思い出させるような環境です。

定期考査や学校行事は一般的な内容が中心で、体育祭や音楽祭などが実施されています。校外学習については、2年生が鎌倉を訪れ、寺院を見学したり、大仏の前で記念写真を撮ったりする活動を行いました。鎌倉までは電車で1時間ほどで、実はこの校外学習が前日に実施されたばかりでした。

当日は、教員が町田駅でのチェックポイントを担当したり、高德院の大仏前で生徒全員の到着を確認したりと、位置情報を活用しながら迷子になった生徒を連れ戻すなど、かなり慌ただしい一日となりました。しかし、大きなけがや体調不良者も出ることなく、無事に終えることができ、現在は少しほっとしているところです。

初めて学級担任を務める中で、毎日が目まぐるしく過ぎていく感覚があり、改めて担任業務の大変さと責任の重さを実感しています。

## 3. 大変なところ

昨年度、この研究会の場で発表させていただいた際には、すべてが初めての経験で、授業づくりも一からのスタートだったため、何をやるにも手探りの状態で、とにかく時間がかかっているという話をしました。授業については、1年間経験を積んできたことで、授業の組み立て方やワークシートの作成など、少しずつ感覚がつかめてきたと感じています。知っていることが増えた分、「なんとなく分かる」場面が増えてきました。

一方で、少人数授業で3学年すべてを担当しているため、英語の授業だけで週20コマを受け持っています。準備にかかる時間は依然として多く、空きコマもあまりないため、放課後や土日に授業準備を行うことが多く、他の先生方と比べても時間がかかっていると感じています。

学級経営については、本当にすべてが初めての経験です。自分の学年、自分の学級を持つことが、副担任のときはここまで違うのかと、日々実感しています。学期初めの係・委員会決めや、誰にどの役割を任せるかを教員がサポートしながら進めること、音楽祭や体育祭などの行事を通して、成長の真ただ中にある生徒たちにどのような言葉をかけるか、トラブルが起きたときにどう支援するかなど、すべてが新しい経験です。

副担任として一歩引いた立場で見ていた昨年度とは異なり、今年度は自分が前に立って判断し、話をしなければならない場面が多くあります。実際に、音楽祭をめぐるクラス内のトラブルなどもありましたが、他の先生方から助言をいただきながら、何とか乗り越えてきました。

40人学級ということもあり、生徒一人一人がさまざまな特性を持っているため、生活指導や個別の支援の難しさも感じています。副担任のときと比べて責任の重さが増し、「あのとき、こうしていればよかった」「こういう声かけが大切だったのだな」と、日々振り返る場面が多くあります。学級での声かけや過ごし方、過ごさせ方が、すべてにつながっていると実感している点は、昨年度との大きな違いです。

また、生徒一人一人が本当に違う存在であることを改めて実感する中で、保護者の方との連携についても、徐々に感覚がつかめてきました。現在、自分のクラスは34名ですが、関係性が築けてきたことで、保護者の方とのやり取りも比較的スムーズに進められていると感じています。ただ、年度当初は、どの程度連絡をすればよいのか、どのような言葉を選べばよいのか分からず、手探りで向き合ってきた一年だったと思います。

部活動については、週4日（土曜日を含む）、平日は2～3時間、休日は3時間程度の活動を行っています。部内でのトラブルも、少し目を離すと起きてしまうことがあり、その対応の難しさを感じながら指導にあたっています。もう一人顧問の先生がいますが、連携の取り方については、昨年度よりは少しずつ分かってきたものの、まだ悩む場面も多くあります。どうするのが最善なのか、日々考えながら、生徒と一緒にバドミントンに取り組んでいるという状況です。

さらに、学年団の一員としての役割についても変化を感じています。昨年度は副担任として学年団に所属していましたが、担任になったことで、「どう思いますか」「2組をどうしていきたいですか」といった形で、自分の意見を求められる場面が増えました。二年目とはいえ担任であることに変わりはなく、ベテランの先生方の前で自分の考えを述べることに難しさを感じることもあります。先生方それぞれが大切にしている考え方が異なる中で、意見をすり合わせる過程で衝突が生じることもあり、悩む場面もあります。

知っていることが増える一方で、責任も増え、時間が足りないと感じることが多いのが現状です。授業準備にも力を入れたいですし、学級のことについても考え、工夫したいことが多く、やりたいことに対して時間が追いついていないと感じています。

## 2年目

### 知っていることが増える！責任も増える！

時間が無限に欲しい！  
先輩方、いつ勉強されて  
いますか、、、？

#### 授業準備

計画、ワークシート、スライド  
週20コマ分

#### 学級経営

行事、学期始め  
生活指導  
不登校対応

#### 部活動

週4、2～3時間、生活指導

#### 学年団の一員

指導の方向性を合わせる  
失敗もする

#### 4. では、モチベーションは？

一つ目は、授業における仕掛けづくりです。教材研究の時間を十分に確保することはなかなか難しいと感じていますが、「こんなことをやってみよう」「こうしたら子どもたちはどんな反応をするだろうか」と時間をかけて考えた授業ほど、生徒の反応は良いと実感しています。研究授業を見学したり、研究会に参加したりする中で得たアイデアを、「自分の学校・自分の生徒の実態に合うかどうか」という視点で試し、振り返り、また改善するという繰り返しが、新しい授業を生み出していく面白さにつながっています。

昨年度から自分の学年の授業計画を担当していることもあり、ABCから英語を学び始めた生徒たちが、現在は受け身などの表現に挑戦し、「こんなことが言えるようになった」「前よりもつまみかずに話せるようになった」と成長していく姿を実感しています。生徒からそのような言葉をかけてもらえると、授業づくりの楽しさや、英語教員になってよかったという思いを強く感じます。

また、中学1年生の頃から一緒に過ごしてきた生徒たちとの間には、担任になったことでより信頼関係が深まり、一人一人の良さや得意なこと、今後さらに伸ばしてほしい点が見えてきたと感じています。昨年度は互いに緊張しながら向き合っていた部分もありましたが、今では打ち解け、体は大きく成長していても、素直で可愛らしい中学生としての一面を日々感じながら、教室で過ごす時間を楽しんでいます。

現在、特に意識して取り組んでいるのが「価値づけ」です。生徒が良い行動をしたときや、素敵な言葉を使ってくれたときには、できるだけ具体的に言葉にして伝えるようにしています。「いいね」で終わらせるのではなく、「こうしてくれたから嬉しかった」「こういうところが素敵だと思う」と伝えることで、本

人だけでなく周囲の生徒も意識するようになり、良い行動が広がっていくと感じています。褒める側としても嬉しく、生徒自身が自分の価値に気づいていく姿を見ることができる点に、担任としての楽しさを感じています。

現在は2年生の3学期で、「受験生ゼロ学期」という話をしながら、卒業後を見据えた関わりを意識しています。特に手がかかっている生徒についても、卒業後はいずれ教員の手を離れていくことを踏まえ、それまでに身につけてほしい力や、どのように成長してほしいかを言葉にして伝えていきます。少しずつ卒業を意識しながら、自分たちで考え、行動できる主体性を育てることを大切にしています。

英語学習の再スタートについては、昨年度は多忙で、自分自身の英語学習に取り組む余裕がほとんどありませんでしたが、今年度は少しずつ時間を確保できるようになりました。通勤時間の約45分を活用し、アプリで単語や文法、リスニングに取り組む中で、改めて「英語を学ぶことは楽しい」と感じています。自分が学んで面白いと感じたこと、特に発音に関する内容は、卒業論文のテーマでもあったため、授業の中に少しずつ取り入れています。そうした工夫が、英語好きの生徒には響き、苦手な生徒にとっても「こうすれば聞き取れるかもしれない」という気づきにつながっていると感じています。

すべてに共通して言えるのは、生徒の成長を間近で見られることが、この仕事の何よりのやりがいであるという点です。卒業式や学期末など、節目の場面では特にその成長を強く感じます。入学当初は小学校の延長のようだった生徒たちが、今では自分たちで話し合い、物事を進められるようになり、心身ともに大きく成長していく姿を日々見ることができています。授業中の発言や、友達への声かけなど、日常の中で小さな成長を見つげられることが、この仕事の魅力であり、続けていく原動力になっています。

## 個人的やりがい4選

### 授業の「仕掛け」

- よく練った授業ほど反応は良い
- トライ→評価→再トライ
- 出来ることが増える楽しさを共有

### 生徒との信頼関係

- 良い所、課題がより見えてきて、かわいい！
- 価値付けにハマっています
- 卒業を徐々に意識し、主体性を育てる

### 英語学習 再スタート

- 通勤の合間にアプリで少しずつ
- 興味のある分野を授業に混ぜていく

### 生徒の成長

- 節目で見られる成長した姿
- 日々の生徒の気づき、表情

## 5. 残りの学生生活、あなたはどのように過ごしますか？

2年前の自分は、ちょうど追いコンが終わり、教育委員会からは配属先が「東京都」ということしか知らされておらず、早く引っ越しをしたい気持ちはあるものの、どこに配属されるのか分からず、ドキドキしながらアパートを引き払う準備をしていたのが、まさに今頃でした。

社会人になると、学生時代とは時間の流れ方が大きく変わります。そこで一つ目として伝えたいのは、「いつかやりたいと思っていることは、今のうちにやっておく」ということです。社会人になると、本当に時間がなくなります。海外旅行、ファッション、趣味、資格の勉強、教材研究など、「いつかやろう」と思っていることは、想像以上に後回しになってしまいます。4月1日を迎えてから「無理かも」と思ってしまう前に、残りの限られた学生生活の時間を使って、少しでも挑戦しておくことが大切だと感じています。

二つ目は、朝型の生活習慣づくりです。自分自身、学生時代は朝が本当に苦手で、典型的な大学生の生活を送っていました。しかし、教員になると早起きは避けて通れません。特に1年目の4月は、生活リズムを整えることが想像以上に大変でした。残りわずかな期間でも、少しずつ生活習慣を整えておくことで、4月からの負担はかなり軽くなるのではないかと思います。

三つ目は、「譲れない指導観を持つこと」です。働き始めると、すべてが初めてで、何が正解か分からず迷う場面が多くあります。困っている生徒にどう関わればよいのか悩んだとき、自分の中に一つでも「これは大切にしたい」「これは譲れない」という軸があると、ぶれにくくなると感じています。

授業であれば、音読、フォニックス、ライティングなど、「ここだけは力を入れたい」という分野を一つ持つことが大切だと思います。自分の場合は発音に強い関心があり、音読を欠かさず行ったり、発音記号を紹介したりすることを意識しています。やるべきことが多い中でも、「これだけは頑張る」と決めておくことは、授業づくりの支えになります。

また、生活指導の面でも、卒業後にどのような人になってほしいかという視点は重要です。教員採用試験の面接などで考えた「理想の生徒像」は、実際に現場に立ってからも生きてくると感じています。どんな人間に育ててほしいかを、少しでも考えておくことよいのではないかと思います。

四つ目は、ICTとAIの活用です。教育現場では、授業だけでなく校務全体において、ICTやAIを活用する力がますます求められています。WordやExcel、デジタル教科書に加え、Kahoot!やQuizletなどのツールを使い、1人1台端末を前提とした授業づくりが進んでいます。事前に少し触れておくだけでも、4月から新しく覚えなければならないことを減らすことができていると感じています。

また、AIについても、今年度に入ってから使用する機会が大きく増えました。生徒たちはGeminiを使って相談することも多く、使いこなすという点では生徒の方が詳しい場面もあります。ただ、「まったく使ったことがない」という状態と、「少し触ったことがある」状態とでは大きな違いがあります。プロンプトの打ち方なども含め、どれか一つでもチャレンジしておくことが大切だと感じています。

2～3月、卒業式や引っ越しでお忙しいとは思いますが、、

- 「いつかやりたい...」はやっておこう！  
(旅行、ファッション、趣味、資格勉強、教材研究など)
- 朝型の習慣作り  
(4月から整えるのは本当にきつい！)
- 譲れない指導観を持つ  
(授業→研究した分野、こだわりたい活動)  
(生活→卒業した後に、どんな人間になってほしいか)
- ICT、AIは仲良くなっておく  
ICT (データ管理、デジタル教科書、Kahoot!、Quizlet、席替えツール)  
AI (Gemini、NotebookLM、ChatGPT)

## 6. おわりに

4月から働き始めると、周囲の先輩方は皆、とても仕事ができるように見え、実際に忙しそうにそれぞれの業務をこなしている姿に圧倒されることが多くあります。その中で、「この先生も忙しそうだから」「今は声をかけづらいかな」と感じてしまい、悩みを一人で抱え込んでしまうこともあるかもしれません。

しかし、1年目・初任という立場は、どの先生も必ず通ってきた道です。困ったときに相談すれば、必ず力になってくれますし、普段あまり話す機会のない先生であっても、実は陰ながら応援してくださっていることがほとんどだと感じています。悩みを溜め込んでしまうことが、何よりも負担になるのではないかと思います。

困ったときには、小さなことでも構わないので、「これはどうやって進めていますか」「先輩はこういうとき、どうされていますか」と、気軽に頼ってみてほしいと思います。悩まずに相談することが、結果的に自分自身を助けることにもつながります。

これから始まる教員生活が、実りあるものになることを心から願っています。

## 大高 智英先生（名古屋市立向陽高等学校）

### 1. 自己紹介

能代市で生まれ、秋田県立能代高等学校を卒業しました。その後、弘前大学教育学部小学校コースに入学しました。大学2年次にコース変更を行い、中学校コースへ所属を移しています。3年次からは英語教育ゼミに所属し、卒業研究や共同研究など、英語教育に関するさまざまな研究活動に参加しました。2024年に弘前大学を卒業しました。

### 2. 勤務校

勤務校は名古屋市立向陽高等学校です。同校は名古屋市立高等学校14校のうちの一つで、名古屋市中心部に位置しています。周辺には徒歩10分圏内に複数の高等学校が立地しており、都市部ならではの教育環境にあります。スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されており、今年3月には、1・2年生が4月からの1年間を通して取り組んできた研究内容をまとめ、成果発表を行いました。高校段階から大学で行われるような研究活動に取り組み、その成果を発表する機会が設けられています。

また、非常に高い進学実績を誇る進学校でもあります。進学先としては名古屋大学に毎年数十名が進学し、京都大学にも毎年数名の合格者を出しています。ほぼ全ての生徒が国公立大学または私立大学へ進学しています。

学級編成は、1学年9クラスで、内訳は普通科8クラス、国際科学科1クラスです。1クラス40名、1学年約360名、全校で約1,080名が在籍する大規模校となっています。

## 名古屋市立向陽高校

### SSH指定校

進学先⇒名古屋大学が多い

クラス⇒1学年9クラス

(普通科8 + 国際科学科1)

1クラス40人学級

授業⇒65分×5コマ

(午前3コマ + 午後2コマ)

### 3. 現在

授業は1日5コマ（午前3コマ+午後2コマ）で、1コマ65分です。授業時間は比較的長く設定されています。

教職2年目であり、1年目は副担任を務めていました。現在は1年生の担任を担当しています。担当教科は1・2年生の英語で、英語コミュニケーションIを2クラス、論理表現Iを2クラス、論理表現IIを2クラス受け持っています。

校務分掌は指導部を担当しています。また、部活動では女子バレーボール部の顧問を務めており、他の顧問教員と2人体制で指導にあたっています。

### 4. 教師を目指すきっかけ

幼少期から一貫して強い教員志望を抱いていたわけではありませんでした。小学生の頃は宇宙に強い関心を持ち、天文学者に憧れていた時期がありました。中学生になると、医師として人の命を救う仕事に就きたいと考えるようになりました。一方で、その頃から漠然と教職という進路も選択肢の一つとして意識していました。

高校進学後は、英語の学習に楽しさを感じるようになり、国際関係の分野で働くことにも興味をもつようになりましたが、その際も教員という進路を完全に否定することはなく、複数の可能性を考えながら進路を模索していました。そのため、当初から強い意志をもって教員を目指していたというよりは、揺れ動きながら進路を考えてきた経緯があります。

大学では教育学部に進学したものの、卒業後に本当に教員として働いてよいのかという不安や疑問を強く抱くようになり、日々自問自答する時期が続きました。自分により適した仕事があるのではないかと考え、さまざまな教員に相談を重ねてきました。

そうした対話を通して少しずつ考えを整理する中で、これまで人に教えることにやりがいを感じてきた経験や、教員免許を取得する意義を改めて見つめ直し、「一度教員として挑戦してみよう」という覚悟が固まっていきました。その結果、教員採用試験を受験する決断にいたりしました。

教員採用試験は、名古屋市、千葉県、神奈川県の一つの自治体を受験しました。その結果、名古屋市と千葉県の「中学校・高等学校英語」の区分で合格をいただきました。進路については熟考を重ねましたが、「都市部で挑戦してみたい」という思いから、最終的に名古屋市で働くことを決めました。その後、教育委員会から電話で「名古屋市立向陽高等学校への配属が決まりました。名古屋市へ転居し、居所を明確にしておいてください」と連絡を受けました。

## 5. これまでを振り返り

1年目は、本当に大変でした。所属していた生徒会では、体育祭の要項作成や選手名簿の登録、しおりの作成などに追われ、日々スケジュールに忙殺されていました。そのため、教材研究に十分な時間を割くことができなかつたと振り返っています。遅い日は、夜9時半頃まで学校に残っていた記憶もあります。

社会人としても1年目で、大学の授業でパソコンやExcelの使い方を学んではいたものの、実務で即座に使いこなせるほどではなく、仕事に慣れるだけで精一杯でした。時間もかかり、苦勞の連続だったと思います。自分が担当した定期考査についても、先輩方に大部分を作成していただき、それをもとに自分が少し修正を加えて提出するという状況でした。今振り返ると恥ずかしさもありますが、先輩方の支えがなければ乗り越えられなかつた1年だったと感じています。

また、土日にはバレーボール部の練習試合や大会の引率があり、平日5日間が終わってようやく金曜日を迎えても、翌朝にはまた学校へ向かうという生活でした。休める日は限られており、まさに働き続けているような毎日でした。

2年目となる今年は、前年と同じ教材を使わせていただけるようになり、教材研究に余裕が生まれました。また、名古屋市立向陽高等学校の年間行事予定や学校全体のスケジュールにも慣れ、先を見通して動けるようになったことで、気持ちの面でも少し楽になったと感じています。

一方で、今年は初めて学級担任を任せていただき、特に4月当初は慌ただしい日々が続きました。新入生は提出書類が非常に多く、こちらから配布・回収しなければならない資料も山積みで、誰が提出済みで誰が未提出なのかを確認する作業には苦勞しました。

ただ、学級担任を務めたことで、生徒と関わる時間は格段に増えました。一人ひとりのやりたいことや趣味、考えていること、得意科目・苦手科目など、さまざまな側面から生徒を見ることができるようになり、担任を経験できて本当によかつたと感じています。高校生という、人生において大切な青春の一時期に関わることができ、その一ページを共に過ごせることを、とても嬉しく、また誇りに思っています。

## 6. 学級担任をやってみて

学級担任を務めていて大きく感じていることは、主に二つあります。一つ目は「使命感」です。生徒の個票には担任名を記入する欄があるのですが、生徒がボールペンで自分の名前を書いているのを見たときに、「自分の名前が、記録として残る書類に記載される存在なんだ」と強く実感しました。その瞬間に、これからこの40人の生徒を、1年間しっかりと見届けていかなければならないという使命感が芽生えました。

また、学校行事の準備を生徒と一緒に進める中で、うまくいったことや、思うようにいかなかったことなど、さまざまな感情を共有できるのも、担任ならではの魅力だと感じています。そうした経験を生徒と共に積み重ねていけることは、とても面白く、やりがいのあることです。

二つ目は「信頼関係」です。本当に当たり前のことではありますが、生徒から「これはいつまでお願いしていいですか」「この書類はいつまでに必要ですか」といった相談や依頼を受けた際に、それを約束どおりきちんと行うことは、目には見えにくいものの、確実に信頼関係の構築につながっていると感じています。日々、生徒から頼まれたことを誠実に守り続けることは、担任として非常に大切な姿勢だと考えています。

一方で、1年間担任を務めてみて課題だと感じているのは、普段あまり自分から話をしない生徒との関わり方です。話しかけてくれる生徒とは自然と関係を築きやすい一方で、こちらから意識的に関わらなければ見えてこない生徒の思いや悩みも多くあります。言葉を交わさなければ見えない部分が、生徒の心の中にはたくさんあると感じています。

そのため、最近「1週間のうちに、どれだけ担任の生徒一人ひとりと話せているか」「どれだけ多くの生徒と関わることができているか」を意識しながら、日々の声かけを大切にしよう心がけています。

## 7. 授業

授業に関して強く感じているのは、「自分が理解していること」と「相手に理解してもらえること」は、まったく別のものだという点です。自分の中で単語や文法が理解できていても、それを生徒が納得できる形で説明する力は、また別の能力だと日々実感しています。

授業では、特に意識して取り組んでいることがあります。英語コミュニケーションの教科書には本文があり、ページの一角に関連するトピックが提示されていますが、その内容について「生徒自身はどう思うのか」を、英語で表現させたいと考えています。本文中の文法事項や新出単語を理解して終わりにするのではなく、書かれている内容をもとに、自分なりの考えを持ち、それを言葉にするところまで持っていくことを目標にしています。

例えば、イースター島のモアイ像を扱った題材では、「正当な所有者は誰なのか」という問いを生徒に投げかけます。現在、モアイ像の一部は大英博物館に所蔵されていますが、本来の所有者であるイースター島の住民のもとにあるべきなのか、それとも安全に管理されている博物館に置かれるべきなのか、どちらが正当だと思うかを考えさせます。そうしたテーマについて、生徒が自分の意見を英語で表現するところまで授業で扱うようにしています。

こうした授業づくりは、自分が弘前大学 教育学部で学んだ内容と、非常に密接につながっていると感じています。発音練習や発音記号の指導は英語音声学の学びと結びついていますし、文法規則の

背景にある考え方は、大学時代に学んだ言語学の授業が土台になっています。大学で受けた授業の多くが、現在の授業実践に生きていますと実感しています。

また、授業の導入として、3分程度、生徒同士で「最近あった面白いこと」や「驚いたこと」を隣の人と話す時間を設けたり、BBC や CNN のニュースをスクリーンに映し、生徒と一緒に内容を考えたりすることもあります。こうした活動を4~5分ほど行うことで、授業への入り口をつくっています。

日常生活の中でも「これは授業で使えそうだな」と思える話題や出来事を意識的に探すようにしています。普段の生活で触れるニュースや出来事を、いかに授業につなげていくかを考えることも、教師としての大切な仕事の一つだと感じています。

## 8. 授業

自分が理解していること ~~≠~~ 相手に理解してもらうこと

### 8. 部活

部活動についてですが、担当しているバレーボールは、自分自身が中学・高校の6年間ずっと続けてきた競技というわけではないため、ルールや技術面など、まだ十分に理解しきれていない部分も多くあります。現在は、生徒と一緒に対人練習を行ったり、ネット越しにボールを出したり、サーブ練習で実際にサーブを打ったりしながら、体を動かす中で、生徒と共にルールや技術を学んでいるところです。

大会の際には審判を務めることもあります。大会にはさまざまな強豪校が参加するため、そこで他校の顧問の先生方と交流が生まれ、「このような指導方法はどうでしょうか」「レシーブを安定させるためには、どのようにトスを上げていますか」といった具体的な話を伺うことができる貴重な機

会にもなっています。部活動は土日を含めて多くの時間を要しますが、他校の顧問の先生方とつながりを持てる場でもあると前向きに捉えています。

最近、特に意識しているのは、平日どれだけ忙しくても、体育館で生徒が練習している時間に必ず顔を出し、「きちんと見ている」という姿勢を示すことです。これは、大会メンバーを選考する際の判断材料にもなりますし、生徒にとっても、「この先生が見て判断した結果なら納得できる」と思ってもらえることが大切だと考えています。

そのためにも、日々の練習の積み重ねを見守り続けることが、顧問としての信頼関係を築く上で欠かせないことだと感じています。忙しい中でも継続して練習に関わる姿勢を大切にしながら、生徒と向き合っていきたいと考えています。

## 9. 大高の3つのメモ

最近、仕事をする上で「これは意識しておかなければならない」と強く感じていることが、三つあります。

一つ目は、優先順位をつけることです。特に優先順位が高いのは、他の先生方と関わる仕事だと考えています。例えば、定期考査が近づいてくると、共通問題の作成など、締め切りが明確に決まっている業務があります。こうしたものは、締め切りまでに必ず終わらせることはもちろん、締め切りが設定されていない場合でも、できるだけ早く他の先生に確認していただくことが大切だと感じています。そうした「他者と関わる仕事」を先に終わらせ、その後で、自分一人で取り組める教材研究や準備などを行う。この優先順位のつけ方は、非常に重要だと考えています。

二つ目は、勤務校の校長先生や教頭先生から教えていただいたことですが、「人間は感情動物」という視点です。学校の仕事は、ルールやシステムに基づいて進んでいきますが、実際には、言葉の選び方や謙虚な姿勢によって、「この人と一緒に仕事をしたい」「この人のためなら時間を使ってもいい」と思ってもらえるかどうかが大きく変わってくると感じています。相手にとって気持ちのよいコミュニケーションを心がけることが、結果的に仕事の進めやすさにもつながるのではないかと思います。その一つとして意識しているのが、「言葉のワンクッション」です。先輩の先生に声をかける際には、「お時間よろしいですか」「自分がよく分かっていなくて」といった一言を添えることで、相手への配慮を示すことができると考えています。こうした小さな積み重ねが、人間関係を円滑にするのではないかと感じています。

三つ目は、仕事の中に「遊び」や余裕を持たせることです。教員の仕事には責任が伴い、守らなければならない規則や締め切りも多くあります。例えば定期考査では、決められた範囲を限られた授業時間で終えなければならず、どうしても焦ってしまったり、視野が狭くなってしまったりすることがあります。そうしたときこそ、楽しむ気持ちや落ち着く姿勢を意識することが大切だと感じています。忙しいときほど、あえて他の先生と話をして気持ちを落ち着かせたり、周囲の会話に耳を傾け

て冗談を交わしたりする余裕を持つことが、結果的に自分を支えてくれると感じています。締め切りに追われて「間に合わせなければ」と思い詰めてしまうと、かえってミスにつながることもあります。だからこそ、そうした場面でこそ、少し肩の力を抜き、「遊び」の感覚を持つことが大切だと考えるようになりました。

## 10. 最後に

まもなく教員として三年目に入りますが、今のところ、この仕事は自分にとって天職だと感じています。生徒の大切な青春の時間に関わり、一緒に楽しい瞬間を共有できることは、何よりの喜びです。また、学年が上がっていく生徒を長期的に見守ることができる点にも、大きな使命感とやりがいを感じています。

今後、5～6年勤務した後には異動もありますが、学校ごとに異なる文化や背景を持つ生徒とどのように向き合っていくのか、その場その場で臨機応変に対応する力こそが、教師としての力量なのではないかと考えています。この仕事に飽きることは、きっとないだろうと思いますし、生涯続けていきたいと思える仕事に出会えたことを、幸せに感じています。

## 11. 大高の3つのメモ

### 1. 仕事の優先順位

他の先生と関わる仕事（共通で作るテストなど）はいち早く順位をうまくつけると、見通しが持てて気持ち楽

### 2. 人間は感情動物

言い方や謙虚さが、仕事のやりやすさに（言葉のワンクッション）

### 3. 仕事に遊びを持たせる

忙しくなると、つい視野が狭くなる。そういうときこそ楽しんで冗談を言う余裕、笑いとばす余裕（生徒や教員に対して）

## 11. 大学生の皆さんへ

最後に、大学生の皆さんへお伝えしたいことがあります。先ほどのお話にあった内容と重なる部分もありますが、私自身も朝があまり得意なほうではなかったもので、特に伝えたい点です。

一つ目は、早寝早起きの習慣を身につけることです。大学4年生頃からでも構いませんので、早く寝て、朝起きる生活リズムを意識的につくっていくことは、とても大切だと思います。教員になる

と、勤務時間は基本的に朝 8 時半から夕方 5 時までとなり、4 月当初はその生活に慣れるだけでもかなり大変です。慣れるまでに時間がかかるからこそ、学生のうちから生活リズムを整え、朝から体も頭もきちんと動く状態をつくっておくことが重要だと感じています。目を覚ます方法は人それぞれで構いません。私の場合は、朝起きてすぐに外に出て散歩をすることで目を覚ましていましたが、自分に合ったやり方を見つけて工夫していくことが大切だと思います。

二つ目は、時間の使い方です。大学生は、平日・休日を問わず、社会人になる前の中で最も自由に使える時間がある時期だと思います。だからこそ、自分のやりたいことや趣味、何か打ち込めるものがあるなら、ぜひ今のうちに思い切り取り組んでほしいと思います。

三つ目は、「これだけは頑張った」と言えるものを見つけてほしいということです。私自身の場合は、英語の勉強でした。英検 1 級に挑戦する中で、2 回不合格を経験しましたが、その過程での努力や失敗の経験は、今振り返るとさまざまな場面で生きています。授業での説明や、生徒に話をする際の具体例としても役立っていますし、発音指導やライティング指導など、実際の授業にもつながっています。取り組む内容は人それぞれで構いません。部活動でも、サークル活動でも、学業でも、「これだけは本気でやった」と言える経験があると、教員になったときに語れるエピソードになりますし、授業や部活動指導の中でも必ず力になると思います。ぜひ、大学生活の中で、自分が一番頑張ったと言えるものを見つけてほしいと思います。

## 大学生の皆さんへ

1. 生活習慣を整えておく
2. 時間は大学生が一番ある。趣味などがあれば今！
3. 何か一番頑張ったといえるものをつくる  
(勉強・部活・資格など何でも)

## 第2部「4月から教壇に立つ学生の不安や悩みに応える」

参加者全員で、4月から教壇に立つ学生の悩みついてざっくばらんに語りました。

学生から出された悩みとしては・・・

- 忙しい中でどのように教材研究の時間を捻出しているのか？
- CNN や BBC などのオーセンティックな教材の活用方法
- 教員になるという目標が明確に決まっていなかったなかで、大学生の間にやっておいた方がよいこと

が挙げられました。

### 若有先生から

私自身も、以前、宮城県の高校で教員をしていた経験があります。そのため、若手の先生方のお話を伺いながら、自分が高校教員として働いていた頃のことを、重ね合わせるように思い出していました。お二人とも非常に勉強熱心で、高い意識を持って生徒に指導に取り組まれている点がとても印象的でした。正直なところ、自分が教員をしていた頃は、ここまで真摯に向き合えていただろうかと振り返り、少し恥ずかしく思う部分もありました。

その上で、若手の先生方にとって大切だと感じることを一つ挙げるとすれば、「失敗をシェアできる人間関係を持つこと」です。先輩から「こうしなければならない」「ああしなければならない」と教えられることは理解できても、現実には思うようにできないことも多くあります。特に、自分のようにごく普通の教員にとっては、すべてを完璧にこなすことは簡単ではありません。そのときに、失敗をそのまま共有できる相手がいるかどうかは、とても大きな意味を持ちます。なんとなく取り繕いながら仕事を続けていると、「できない現実」への悩みが少しずつ積み重なり、やがて一人で抱え込んでしまうことがあります。そうすると、次第に心が苦しくなってしまいます。だからこそ、失敗を率直に話せる人間関係を、ぜひ大切にしてほしいと思います。

大高先生の発表では「教職が天職」とお話されていましたが、私の場合はそうではありませんでした。教員になって最初の2か月が終わったとき、「あと36年10か月もあるけれど、どうしよう」と、正直、絶望的な気持ちになったこともあります。そうした現実の中で、どのように希望ややりがいを見出していくかは、とても重要なことだと感じています。学校によって状況はさまざまだと思いますが、私自身はかなり大変な勤務校にいました。土日のどちらかは2週間に1回、家庭訪問に回るような生活で、勉強会に参加しようと思っても、指導や対応で行けなくなることが何度もありました。そうした経験を通して、自分の中でやりがいや希望を見つけていくことの大切さを、強く実感しました。

最後に一つだけお伝えします。若いうちは「時間とエネルギーはあるけれどお金がない」、中堅になると「お金とエネルギーはあるけれど時間がない」、年齢を重ねると「時間とお金はあるけれどエネルギーがない」と言われます。なかなかうまくはいかないものです。だからこそ、今、皆さんの手元にある「たくさんさんの時間」を、ぜひ有意義に使ってほしいと思います。4月までの残された期間を、今日の先生方の話を参考にしながら、楽しみつつ、大切に過ごしていただければと思います。 (文責：佐藤 剛)